

氏名	李文鑫
学位の種類	博士（日本語教育学）
学位記番号	博甲第 8910 号
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日本語学習者の誤用からみる日中認知の異同 —イメージ・スキーマと概念メタファーを中心に—

主査	筑波大学	教授	博士（言語学）	小野 正樹
副査	筑波大学	准教授		木戸 光子
副査	筑波大学	准教授	Ph.D. (Japanese Linguistics)	ブッシュネル ケード コンラン
副査	筑波大学	教授	博士（言語学）	矢澤 真人
副査	早稲田大学	教授	Ph.D. (言語学)	今井 新悟

論文の要旨

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者のコロケーションの誤用に基づき、イメージ・スキーマ及び概念メタファーにおける日中の違いを明らかにしている。学習者コーパスに現れる「重い」「深い」を含むコロケーションの「直訳」と「非直訳」の誤用例に基づき、日中の【力】スキーマと【容器】スキーマの異同を明らかにし、概念メタファーの認定手順、認定手順の適用範囲、およびメタファーの種類と語義の関係について述べている。分析方法として、日本語と中国語のコーパスを用いて、〈思考〉メタファー、〈興味〉メタファーの異同を追究し、これらの調査により得られた結果から学習者の誤用原因は言語転移（直訳）だけでなく、概念転移（非直訳）の影響があることを主張している。第1章は研究の背景と目的を述べ、第2章では先行研究及び研究課題を論じ、3章から6章が分析内容となっており、3つの課題に取り組んでいる。

課題1：イメージ・スキーマにおける日中の異同

第3章では【力】スキーマと【容器】スキーマの日本語と中国語の異同をめぐり、Lang-8 学習者コーパスから「重い」に関する誤用例を抽出し、身体動作（深部感覚、皮膚感覚）、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚）、内臓感覚において、誤用分析を通じて【力】スキーマの日中の異同を追究した。本結果を踏まえ、Lang-8 学習者コーパスから「深い」を含むコロケーションの「直訳」と「非直訳」の誤用を抽出したところ、学習者の誤用は思考類名詞と感情類名詞と共起の際に集中している。日中両言語の【容器】スキーマの依存度を見ると、日中両言語は【容器】スキーマと関与しているが、中国語は【容器】スキーマの顕在化が要求される場合が多く、日本語では、【容器】スキーマは多くの場合〈言葉は水〉という概念メタファーに内蔵され、背景化されている。

課題 2：概念メタファーの認定手順

第4章では、①メタファーの認定、②概念メタファーの認定、③メタファーの種類認定の手順として、〈情報〉を目標領域とする概念メタファーを検討し、意見文コーパスから〈情報は食べ物〉〈情報は水〉の2つの概念メタファーを検出し、字義通りの意味と文脈上の意味に乖離がある語の共起語を調べ、メタファー表現の種類と語義の関係を明らかにした。

課題 3：概念メタファーにおける日中の異同

第5章では、学習者コーパスから「頭」「脳」「思考」に関する母語の「直訳」「非直訳」の誤用を抽出した。〈思考〉メタファーに関して、中国語では、〈脳は考えを知覚する器官〉という上位メタファーの下に、〈脳は容器、考えは内容物〉、〈脳は幕、考えは映像〉の2つのサブメタファーがある。一方、日本語では、〈頭は考えを知覚する器官〉という上位メタファーの下に、〈頭は容器、考えは内容物〉、〈頭は幕、考えは映像〉の2つのサブメタファーがあることから、日中において目標領域に異なりがある。次に、日本語でも中国語でも〈考えは機械の動き〉という上位メタファーがあるが、そのサブメタファーとして、日本語では〈頭は機械〉があるのに対して、中国語では〈脳は機械〉があることを明らかにし、目標領域及び写像において日中両言語にズレがあることを示した。

第6章では、「興味」を目標領域として、日本語と中国語の概念メタファーの異同を探るため、学習者コーパスに現れる個々のコロケーションの誤用を分析している。中国語では〈興味は植物〉という概念メタファーが発見されたのに対して、日本語では〈興味は液体〉という概念メタファーが発見され、それを支えるイメージ・スキーマとして【力】スキーマ、【容器】スキーマが挙げられることを述べている。

上記分析から、以下が結論となる。中国語と日本語の異なりとして、中国語は〈興味は植物〉であるのに対して、日本語では〈興味は液体〉という概念表象が異なることから、「*興味を培養する」の誤用では、L1の概念メタファーにアクセスせずに、中国語の“培養”直接的に日本語の「培養する」に翻訳される。この理由としては、L1の意味と、語と語の結びつきの知識を利用していることに拠る。「*興味を培養する」の誤用は言語転移であるが、「*興味を抜く」の誤用では、中国語に直訳して、“*拔出兴趣”という表現が成立しないことは、L1の意味だけ利用して、このような語と語の結びつきに辿りつかないためである。つまり、L1の概念メタファーにアクセスすることで、このような非直訳の誤用が引き起こされると考え、「*興味を抜く」の誤用は概念転移と位置づける。

「*味が重い」と「*重い雨」の例からは、外部からの刺激が五感に与える力の強さを表している。言語レベルにおいて、「*味が重い」は母語の直訳である。L1の意味と、語と語の結びつきの知識を利用しているため、言語転移と言える。一方、「*重い雨」は母語の非直訳である。外部からの刺激は視覚・聴覚に与える刺激の強さを記述するとき、【力】スキーマにアクセスし、概念とその概念を表す語のリンクは日中で異なるため、誤用が引き起こされている。さらに、「*傾向が重い」は、AがBに与える抽象的な力そのもの（思考、感情、抽象物）の強さを表している。これも母語の非直訳であるが、スキーマレベルにおける【力】スキーマによるものである。これらを日本語に修正すると、「味が強い」「強い雨」「傾向が強い」になる。日本語の【力】スキーマと語のリンクは中国語の【力】スキーマと語のリンクと異なり、概念転移と考える。

審査の要旨

1 批評

従来学習者の誤用の原因は多くが母語の「直訳」によるもので、言語転移だと言われ、母語の「直訳」では説明できない「非直訳」の誤用は学習者の中間言語であるとまとめられがちであるが、本研究では、学習

者の「直訳」「非直訳」の誤用を見据え、日中両言語の認知の違いを明らかにした。さらに、それを基盤として、学習者の誤用は言語転移によるだけでなく、概念転移によるものもあるという可能性、および、学習者の概念誤用は概念メタファーとイメージ・スキーマの両方に起きる可能性を示した。

中国語母語話者の産出する日本語作文データ分析を行い、「*興味を培養する」の誤用では、中国語の“培養”という表現を日本語の「培養する」に翻訳することで誤用が起きていることを示す一方、「*興味を抜く」の誤用では、中国語には“*拔出兴趣”という表現がないことから、誤用のメカニズムが直訳ではないことを前提とし、L1 の概念メタファーにアクセスすることで、このような非直訳の誤用が引き起こされる概念転移であることを主張している。概念転移という発想は新たな視点であり、誤用分析に新たな切り口を提供している。同様に、「*重い雨」「*傾向が重い」などの誤用例を示し、これらも概念転移として説明できることを示し、この分析視点の妥当性を担保している。このように例が複数挙がっていることはよいとしても、本研究で使った学習者コーパスでは学習者日本語レベル等の情報が不明である。学習者の日本語レベルによる概念転移の違いがあるのではないかという疑問には答えられない。これは今後の課題とし、さらなる研究の進展が望まれる。

2 最終試験

平成 31 年 1 月 30 日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審査の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（日本語教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。